

# 解体の危機に瀕する、都城市民会館に寄せて

## 未完の恐竜、メタボザウルス

### 喚起力の総体、文化の自覚を

空に向かって恐竜メタボザウルスが身を起そうとしていく。今、行政の手によって解体の危機に瀕している、宮崎県都城市の市民会館を最近に仰いだとき、私が抱いた幻想である。もともと想定されたのは内耳だ。そなたが、扇、翼、観覧車、巻き貝と、この建物には様々なイメージが投影されてきた。それらはいずれも開かれ、広げられ、口や螺旋の軌跡を描くというように運動を意識させる形である。この停止する「このない動感」を伴う姿こそは、都城市民会館建築の真骨頂だろう。

この建物が南九州はもとより、国内はおろか世界的に貴重な近代の文化財であることは、とくに認識済みなのである。けれども、外部評価の定まった過去の遺産だから保存すべきだと言いつもりはない。なぜなら、この建築の価値の核心は、

今なお近づく意に「なんだこれは」という衝撃を与え続ける。現役の、とてつもない偉容にあるからだ。

その特異な姿だが、設計当初の計画によると、左右対称をずらした特徴的な扇形の屋根の梁やコンクリートの外壁を、アルミで覆って仕上げるはずだったと聞く。経済的な事情で、計画が変更されたをさだ、とすれば、いわば未完成であることにより、構造七素材をあからさまに

する現在の外観が生まれたことになる。それは同時に、菊竹氏が提唱したメタボリズム理論が、内側に隠されず、目に見えぬ形として外に現れることを意識した。

メタボリズムとは、近ごろ国をあげて大騒ぎのメタボリックと同じ、新陳代謝のことである。生物のように新陳代謝を繰り返しながら成長し、生命を維持していく都市や建築という理念が、ここではコンクリートの不変的な土台や壁と、鉄の可変的な屋根の組み合わせによって実現されている。そのうえ屋根の建設には、異例なことに、地域の工業高校の生徒が実習を兼ね

て参加したことも忘れてはならない。つまり、経済的なマイナス要因をも含めた地域の深い関与が、迫力のある異形の芸術作品を創出したのだといえる。

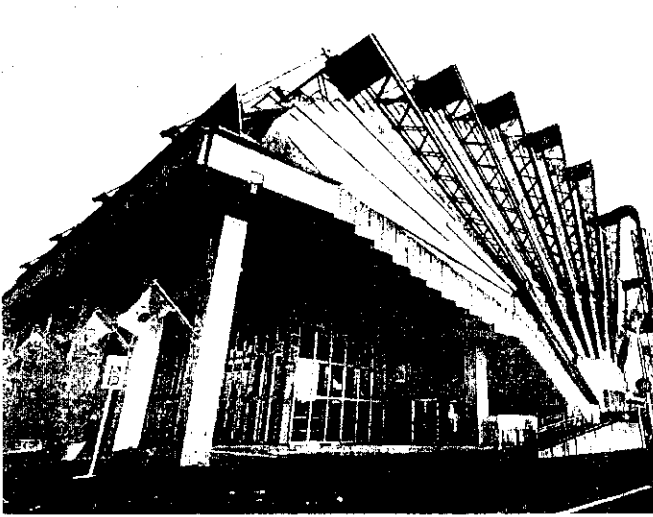
メタボリズム理論に倣い、この建築を生命体とみなすならば、当然代謝のプロセスの果てには死、イコール解体が組み込まれているだろう。しかし、代謝のプロセスを経ないままに解体するとすれば、それは不慮の事故死のようなものだ。そのとき葬られるのは、どこにでもある代官可能な箱モノではなく、建築家と時代および地域の関わりのうえに成立した姿、四十年にわたって保たれてきた独自の景観、そして現代美術家・高橋格がこの市民会館をモチーフにして創作したインスタレーション「憂鬱のアンギラス」のような、次代の優れた芸術作品を生ましめる喚起力の総体、すなわち文化なのだということを自覚すべきである。

幸いなことに、不変部分のコンクリートは緻密で美しく、あと百年は持ちそうだ。極論すれば、たとえ放棄され、廃墟になっても存在の価値があるということを前提に、解体の時計を限りなく遅らせてほしい。

(いしかわ・ちかこ)宮崎大学教育文化学部准教授、専門は美術理論

石川千佳子

今年七月に、この建物がDOCOMOMO(近代運動に関わる建物・環境形成の記録調査および保存のための国際組織)日本支部の二〇〇六年度建築十選に選ばれたことを受けて、都城市立美術館では、「南九州の文化と建築を考える会」の主催による「都城市民会館再訪」DOCOMOMO選記念展」が開かれた。会場の床の大きな日本地図には、これまで選定された建築の写真やタンボール箱が貼りつづけた、DOCOMOMOキユーブが積み上げられている。みれば、南九州に置かれたキユーブは都城市民会館だけだ。



偉容を誇る都城市民会館。写真手前が出入り口

# 文化

ファクス:092(711)6243  
メール:bunka@nishinippon.co.jp

## 来年1月から解体の予定

■都城市民会館 一九六六年開館。宮崎県都城市は①老朽化の昨年十月に市総合文化ホールが開館し、役割を終えた②年間約五千万円の維持費が重荷などを理由に、市民アンケートをへて二月に解体を決定。総額約一億五千三百四十万円の解体工事費とアスベスト(石綿)除去工事費を本年度一般会計補正予算案に計上し、開会中の九月定期議会で審議されている。来年一月から解体の予定。これに対して複数の市民団体などから「日本の現代建築を代表する建造物」と保存を求め、声が上がっている。